



流・交歓が行われた。

全国高等学校校総合文化祭への  
県代表生徒の派遣も、高文連の  
主要な事業の一つである。全国  
高総文祭は、高等学校文化部の  
インターハイとして、毎年各県  
もちまわりで開催されているも  
ので、千葉県で開催された第一  
回大会以来、今年度の沖縄大会  
で十六回を数えるものである。  
沖縄大会では、八月三日から七  
日までの五日間、那覇市、宜野  
湾市等の各部門の会場で、全国  
から一万五千名の高校生が集  
い、作品の展示、練習や研究の  
成果の発表、交流会、合評会等  
が行われた。本県からは、演劇  
、合唱、美術工芸、写真、書道、  
放送文化の各専門部から六十四  
名の生徒が参加し、大会後半、

台風が沖縄を直撃し、帰りの飛行機  
が欠航するというハプニングもあつ  
たが、それぞれ全国の仲間たちと共  
に学び、友情の輪を広げてきた様子  
であった。

中でも、唯一コンクール形式で行  
われた演劇部門では、東北地区代表  
として出場した湯本高校演劇部が、  
顧問である児玉洋次教師の書いた  
「それぞれに如月」という、現代高  
校生の抱える問題を題材とした作品  
を上演し、好評を博した。審査の結

果、四校の優秀校の一つに選ばれ、  
八月三十日に開催された「全国高総  
文祭優秀校東京公演」に招聘され、  
国立劇場の舞台を踏むという活躍を  
見せてくれた。

この他の高文連の事業としては、  
各専門部の研修会や講習会等に対す  
る助成、県内の高校生に質の高い芸  
術を鑑賞する機会を提供する啓発助  
成事業、また、活動内容を広く連盟  
内外に理解してもらうための会報・  
記録集の発行事業等がある。

本県の高文連が発足して六年目が  
過ぎようとしているが、同じく高校  
生の活動に関わる組織「高体連」や  
「高野連」ほどには、一般に知られ  
ていないというのが現状であろう。  
もとより歴史的には、それらに及ぶ  
べくもないが、本連盟も草創期を過  
ぎ、発展・充実に入らねばならな  
い所にさしかかっている。高校生が  
それぞれの活動の中で、文化を継承  
し、育て、新たな創造につなげてい  
く力を身につけられるよう、今後一  
層組織や事業内容の拡充に努め、十  
分な指導や援助ができるようになら  
なければならぬと考えている。

### 福島県書道協会

事務局長 続橋碎雨

本協会は、昭和二十四年五月、会

長に当時の福島大学学芸学部長（現  
教育学部）であられた栗村虎雄氏、  
理事長に同大学書道科の藤本正（号  
竹亭）氏を推して設立された。

戦後、国家神統に低触すると思ら  
れた書道は、一時廃止の憂き目を見  
た。しかし復活に尽力し、習字教育  
を再確認し、すなわち書を通しての  
人格育成を念じ、その結論として、  
情操教育、精神教育のためには、書  
は不可欠のものであること、更にそ  
の目的達成のためには、相互の協力  
と研鑽が必要であることを確認し合  
い、ここに福島県書道協会が誕生し  
たのである。

第一回展（昭和二十四年）は、小・  
中・高・大学の「七夕展」（現たなば  
た展）と合同で、主に臨書を中心に、  
四十点余のものであった。場所は、  
中合パートであったが、それでも  
この展覧会は、県下の書展のトップ  
を切るものとして注目を集めた。

その後、会長の県教育長就任や会  
津短期大学長へのご栄転等、諸般の  
事情もあって、展覧会の開催は中止  
されたり、縮小されたりしたもので  
あった。

しかし、県内の書愛好家の要望も  
強く、会員の意気もあがり、昭和四  
十年八月、第五回展を期に陣容を整  
え、新会長に高橋藤園、副会長齋藤  
芳龍、理事長藤本竹亭の各氏を擁し